The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イベント概要
Author(s)	堀江, 剛
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 33-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79245
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集２　2019 臨床哲学・哲学プラクティス国際セミナー＆ワークショップ

イベント概要

堀江　剛

日時：2019 年 7 月 30 日～8 月 1 日
会場：大阪大学全学教育推進機構実験棟 1 F サイエンス・スタジオ A
主催：大阪大学文学研究科臨床哲学研究室・国立慶北大学哲学科

プログラム

哲学対話演習（7 月 30 日・31 日午前）／進行役：堀江剛（大阪大学教授）
臨床哲学講演（7 月 31 日午後）
14:00-15:30　臨床哲学からフィロソフィへ／ほんまなほ（大阪大学准教授）
16:30-18:00　はじまりの場所：日常で出会った「あなた」から「わたし」が始める臨床哲学／小西真理子（大阪大学講師）

研究発表（8 月 1 日）
09:00-12:00
①　「合理的情緒行動治療」のアイロニーと「論理基盤治療」
キン・ジンテ／KIM, Jin-Tae（慶北大学研究教授）
②　「ゼロ・トレランス型」教育についてのノート
金和永／KIM, Hwa-young（大阪大学博士課程）
③ 哲学相談における「不和」の意味と必然性：「不和」を通じて自己になること
ペ・テジュ／Bae, Tae-ju（慶北大学博士課程単位修得）

13:00-14:00
④ ともにいること（インクルージョン）の成立とそれに伴うアートプロジェクトの記述に基づく考察から
小泉朝未（大阪大学博士課程）
⑤ 芸術作品の深層心理学的理解と美術治療：フロイトの芸術心理学を中心に
ソ・ハンギョル／Seo, Han-Gyeol（慶北大学修士課程）
14:30-15:30
⑥ 念（sati：心を守ること）に基づく瞑想実習の授業プログラム開発のための予備的考察
イ・ウンジョン／LEE, Eun-Jung（慶北大学博士課程単位修得）

⑦ ニーチェ哲学の治癒の力とその限界

ソ・ジュンヒョク／SEO, Jun-Hyuk（慶北大学博士課程）

16:00-17:30　Discussion・MOU 締結

【全体説明】

2019 年 7 月 30 から 8 月 1 日までの 3 日間、韓国の国立慶北大学哲学科から教員・学生 14 名が来日し、臨床哲学・哲学プラクティスに関するセミナー＆ワークショップを開催しました。2017 年夏、同じく韓国の江原大学哲学科の人たちと大阪でセミナーが開催されましたが、それと同様の趣旨でのイベントです。韓国では「BK（Brain Korea）21plus」という人文系のための国家プログラムがあり、哲学系の大学院では韓国社会での問題に人文知を活用するために哲学相談・哲学治療・哲学対話といった研究・教育に対して助成金が交付されています。この二つの研究交流はいずれもこの助成金プログラムによるものです。

1 日目から 2 日目の午前にかけて、慶北大学哲学科の大学院生 7 名を参加者とした 1 日半のソクラティク・ダイアローグ（SD）を行いました。2 日目の午後からは、大阪大学臨床哲学研究室の教員による二つの講義・発表が行われました。3 日目には、大阪大学臨床哲学研究室の大学院生および慶北大学の教員・大学院から、7 つの研究発表が行われました。そこでは、従来の（古典文献読解に基づく）哲学研究とは異なって「どうすれば哲学や哲学的思考を現実の問題にリンクできるか」という模索や試行がさまざまに示されました。また、（江原大学との共同セミナーと同じく）、韓国における「哲学治療」と日本（大阪大学）の「臨床哲学」との違いも感じられました。そこで、研究発表の最後に設けられた意見交換会で、私たちは両者のアプローチの違いを明確にするために、次のような問いを投げかけてみました。

A：問題について、その解決（除去？）を考える
B：問題を生きる人々の声を聴き、ともに考える
両者の共通点・相違点・協力点はどこにあるのか。

大阪大学側からは、B について「ケア」と結びつけた説明がなされたために、「ケア＝感情や共感を重視する」という一面的な理解がもたれてしまい、ケアだけでは不十分ではないか、という意見も出されました。他方、ケアリングとは、理性や思考と対比されるものではなく、より実践的で包括的な関係の知であると、具体的な経験をもとに応答がなされました。上記の 2 つはいずれも重要な視点であり続けると思われますし、今後も議論を続ける必要があるでしょう。今回のセミナーでは、哲学と実践をめぐる問いが、国際的な（少なくとも日韓の）広がりの中で議論されうることを確認できたのではないでしょうか。